

植民地支配がもたらした暴力の連鎖

—朝鮮人BC級戦犯、連合軍捕虜、そして蘭印系の人びと

桜井 均
(PRIME 研究員)

私は1946年生まれで、直接の戦争体験はありません。ですから、私のような年齢の者が最初に戦争について知るのはラジオやテレビを通してでした。なかでも記憶に残っているのは、TBSで放映された『私は貝になりたい』というドラマです。フランキー堺が扮する理髪師清水豊松が主役で、戦争中に上官の命令で瀕死の米兵を銃剣で刺した罪を問われアメリカのMPに連行され、軍事法廷にかけられます。豊松は「上官の命令は天皇陛下の命令で、兵隊は牛や馬のように従うしかなかった」と抗弁しますが、相手にされず、死刑を宣告されます。処刑の日が来て、豊松は13階段を上っていく。その背中に、「今度生まれてくるときには深い海の底の貝になりたい」という絶望的な遺書の声が読まれます。私はこれを小学校6年のときに一人で見ました。子ども心にも、何と理不尽なことだろうと思った記憶があります。

NHKに入ってから、BC級戦犯についていくつか番組が放送されていたことを知りました。例えば、フィリピンのモンテンプル刑務所に収監されていた死刑囚たちが、日本に帰ってきて、戦後の暮らしを始めるというドキュメンタリーがありました。ところが、命拾いした元戦犯たちが、戦地でいったい何をしたのか、何が起こったかというようなことはほとんど描かれていませんでした。

東南アジアなどでBC級戦犯として収容されて

いた日本兵を日本に帰すという助命嘆願運動が全国的な拡がりを見せました。当然のことながら、加害の側面はほとんど語られませんでした。結局、日本人は自分たちの戦争責任を問わなかった。ひたすら、上官の命令で死ぬのは可哀そうだという感情に流されていく。『私は貝になりたい』もそういう受け止められ方をしていました。少なくとも子どもの私はそうでした。

私はドキュメンタリーの現場を離れてからNHK放送文化研究所というところに籍を置いたのですが、そこで過去の番組を集中的に視聴する機会に恵まれました。番組をつくっていたときには、過去の映像は番組に引用するために視聴することが多かったのですが、研究対象とするようになると、「アーカイブ的視聴」ということを意識するようになりました。NHKがどのように戦争について描いてきたか。それは成果としてあったものもあれば、非常に足りないものもあったと。そこで、どういうところが欠落していたのかということも含めて、NHK特有のアーカイブの編制状況について関心をもつようになりました。

そういうことをやっていると、時々、ある番組とある番組が深くつながっている、担当者同士は互いに面識もなく連絡もないのですが、非常に深いところでつながっていることに気づくようになりました。点と点とがつながって、空に星座を

描くように、放送がどんなふうにつくられてきたかということがだんだんわかってきたわけです。それとともに、NHKという放送局のあり方も見えてきました。

そこで、先ほど見ていただいた1991年8月放送の『チョウ・ムンサンの遺書 ～シンガポールBC級裁判～』、それとあとで部分的に見ていただきますが、2017年10月に四半世紀も隔てて放送されたNHK BS1スペシャル『父を捜して ～日系オランダ人 終わらない戦争～』が、アーカイブの中で奇妙につながっている。これら二つの番組を紐づけして考えてみました。

二つをつなぐキーワードは、《ヒントク》という地名です。先ほどの『チョウ・ムンサンの遺書』にも出てきたタイの《ヒントク》という泰緬鉄道の捕虜収容所の名前です。そこはチョウ・ムンサンが通訳をしていたタンピザヤ収容所と同じぐらい、非常に過酷な現場でした。

結論的に言いますと、オランダが植民地支配していたインドネシアに日本軍が侵攻し、激しい戦闘が繰り広げられ、いわば二つの帝国主義同士の巨大な暴力が解放されました。その暴力が、そこに居合わせた個人の中で新たな暴力に転化し、それがトラウマのように積み重なっていった。その結果、もっとも弱いところに、信じられないような暴力が出現していたのです。これら二つの放送『チョウ・ムンサンの遺書』と『父を捜して』を結びつけて視聴することで、「暴力の連鎖」の実相が見えてきたのです。ここで、《ヒントク》という地名を覚えておいていただきたいと思います。

少し寄り道をします。この『チョウ・ムンサンの遺書』には先行する番組がありました。1976年ですから15年ほど前に、『第18田無住宅の夏』というドキュメンタリーをつくりました。第18田無住宅というのは現在の西東京市、ちょうど新旧の青梅街道が交差する辺りにあって、この番組はそこに住んでいた韓国・朝鮮人、台湾人など元BC

級戦犯の人たちを中心に取材したものです。

その番組の最後のところで、シンガポールで処刑されたチョウ・ムンサンの遺書の一部を引用しました。「たとえ靈魂でもこの世のどこかに漂いたい。それができなければ、誰かの思い出の中にも残りたい」。この言葉が私の心にずっと引っ掛かっていました。私はチョウ・ムンサンという人がどんな人かわからないのですが、この遺書の言葉で、なにかつながっているような気がしていたのです。

彼は、自分が日本の植民地の戦いに動員され、朝鮮人軍属として天皇の軍隊に協力し、なぜ日本人として責任を取らされなければならないのか、その抗うことができない自分の運命に対して、非常に深い疑いをもって死んでいったと思います。

その疑問に答えることは到底できないのですが、そのことを考えながら、15年後に『チョウ・ムンサンの遺書』という番組を制作しました。

今日のテーマにも関わりますので、もう少し『第18田無住宅の夏』について触れておきます。ここは木造の戸建ての都営住宅で、昔の映画によく出てくるような平屋の家が100戸ほどあり、真ん中で二つ分けて200世帯が暮らしていました。一軒一軒訪ねると、そこには「スガモプリズン」にいた元BC級戦犯の韓国や台湾の人たちがいました。

ほかには、インドネシアのモロタイ島のジャングルで発見された台湾の高砂義勇兵だった人たちもいました。それから、シベリア抑留から帰ってきた人、満州や南方から引き揚げてきた人。それに、憲兵だった人もいました。

この人たちが田無住宅に入居したのは1956年頃、「もはや戦後ではない」という言葉で有名な「経済白書」が出されたころです。このフレーズは「戦争は終わった」という意味にとられがちですが、戦後の復興経済は終わった、これからは成長経済に切り替えるという意味です。日本人は過去のことを忘れて、高度成長でいこうという宣言

だったのです。

田無住宅は、10年遅れて戦後を始めた人たちが暮らす場所であり、あたかも大東亜共栄圏の縮図のような場所でした。それぞれがグループをつくっていたわけではなく、それぞれが静かに暮らしていました。一つだけエピソードを言いますと、満州から引き揚げてきた女性のところを訪ねると、ボールを一つ持って玄関に出てきました。これは、この方のお子さんの形見だと言うのです。満州から引き揚げてくる途中、延辺自治区のあたりで亡くなったそうです。このお宅の向かい側に、元BC級戦犯の人が暮らしていましたが、あまり交流もなさそうでした。もちろん対立関係のようなものもないのですが、一口で大東亜共栄圏と言っても、そこには非常に錯綜した個人の歴史が詰まっていることを改めて考えさせられました。

今でしたら、ここを舞台に「大東亜共栄圏の縮図」というドキュメンタリーを制作することを思いつくかもしれませんが、その頃の私にはそうした力量もありませんでしたし、30分という放送枠もあって、元BC級戦犯のことを中心に描いたのです。

日本人は自分たちの国のことを、西欧列強の脅威を感じ、追いつけ追い越せの精神でやってきた「遅れてきた帝国主義国家」であると言います。台湾と朝鮮半島を拠点にしつつ、アジア太平洋地域を米欧の植民地支配から解放し大東亜共栄圏を建設するのだという、きわめて独善的な「正戦」論を掲げて侵略戦争に突入しました。しかし、その日本軍の侵攻で一番甚大な被害を受けたのは、米、英、オーストラリア、オランダの軍ではなく、それらの国々によって植民地支配を受けていて戦場となった現地の人びとだったのです。

のちに私は『死者たちの声～大岡昇平・レイテ戦記～』のプロデューサーをしましたが、その制作過程で、同様の現実を知らされました。フィリピン戦線に駆り出された作家・大岡昇平は、日米

の兵隊がどこでどのように戦い死んでいったかを克明に調べ、『レイテ戦記』を書き上げました。しかし、それをフィリピン現代史が専門の池端雪浦さん（のちの東京外国語大学学長）に読んでもらったところ、「これはタガログ語に訳しても、現地の人たちは読みませんよ」と言われたそうです。本当の被害に遭ったフィリピンの人びとがぜんぜん描かれていないと厳しく指摘したのです。その言葉に衝撃を受けた大岡昇平は、それからフィリピン人の被害について100ページも書き足しました。

インドネシアに話を戻しますと、1942年3月に日本軍はインドネシアをオランダの植民地支配から解放すると称して、ジャワ島に攻め込みました。もちろん、石油資源が目的で、植民地解放は名目にすぎません。この嘘っぽさを、評論家の加藤周一は、朝日新聞に連載していた『夕陽妄語』で、こう書いています。「本当に植民地支配からアジア諸国を解放することが日本の政策の目的であったとすれば、シンガポールやインドネシアではなく、まず朝鮮半島や台湾を解放したはずであろう」と。まずは自分の植民地を解放すればいい。そうすれば世界から尊敬されたいだろうと、痛烈な皮肉を飛ばしたのです。

日本軍は、捕虜となったインドネシア系オランダ軍の将兵を、1929年のジュネーブ条約に反して、強制労働に駆り立てました。そして、タイ、ミャンマーを結ぶ泰緬鉄道の建設に動員されたイギリス、オーストラリア、オランダの将兵たちの多くの命が奪われました。そのときの捕虜監視員が、日本の植民地支配下にあった朝鮮や台湾から動員された青年たちだった。その彼らが、戦後になってBC級戦犯の罪に問われ、日本の戦争責任を肩代わりさせられたのです。

他方、長い間インドネシアを統治していたインドネシア系のオランダ人たちは、戦後に起こったインドネシアの独立のために、オランダ本国に

帰っていくことになりました。しかし、そこで彼らを待っていたのは、植民地入植者に対する抜きがたい偏見と差別でした。

『父を捜して ～日系オランダ人 終わらない戦争～』に登場するオランダ人女性は、日本占領下で日本人男性との間に二人の子供をもうけました。相手の日本人は戦後日本に帰ってしまい、彼女は日系人の子どもをつれてオランダに帰って行きました。そこには、オランダ社会の厳しい目がありました。オランダ社会には、根強い反日感情が渦巻いていたのです。それは、1971年に昭和天皇がオランダのアムステルダムを訪れたときに爆発しました。車の窓に何か汚いものを投げつけられたのです。ところが、NHKはそのことをほとんど報道しませんでした。私はNHKに入って3年目でしたので、なんで報道をしないのかよくわからなくて、自分でつくったガリ版刷りのビラをNHKの前でまきました。すると、誰も口をきいてくれなくなったのを今も覚えています。あとでわかるのですが、この事件について昭和天皇は「この度のことは大したことはないが、大きく取り扱われて両国関係に悪い影響を与えることのないように同行記者団によく話しておくように」と指示したそうです。それに従った公共放送もいかなものかと思います。

それでは、12～13分のDVDを見ていただきましょう。終わってからまた少し補足をします。

『チョウ・ムンサンの遺書』のナレーション：

「香港、フィリピン、シンガポール。日本はアジアの解放を旗印に怒涛のように南に兵を進めました。大東亜共栄圏、それは資源をアジアに求めた日本の戦略構想です。鉄鉱石、石炭と豊富な天然資源を有する満州が北の境界でした。そして南には石油、ボーキサイトなどの資源の宝庫、オランダ領東インド、インドネシアが横たわっていました」。

「昭和17年3月、日本軍はインドネシア全土を制圧。インドネシアにおけるオランダの植民地支配は終わりました。日本軍はただちに連合軍の兵士およそ8万人を捕虜として収容しました」。

「ジュネーブ条約は捕虜を軍事目的で働かせることを禁じていました。しかし、日本はジュネーブ条約を批准していないことを理由に、連合軍捕虜を鉄道や飛行場の建設に駆り出しました。1942年、日本軍はビルマでのインパール作戦に物資を送るために、泰緬鉄道の建設を急いでいました。全長415キロ、クワイ川に沿ったジャングルの中の工事は困難をきわめ、「枕木一本、人一人」といわれるほど多くの死者を出しました」。

「連合軍捕虜5万5,000人、アジア各地から駆り出された7万人の人びとが、熱帯のジャングルの中で重労働を強いられました。この難工事で、連合軍捕虜4人に1人が命を落としたのです。雨期のジャングルはマラリア、コレラなど、病原菌の巣でした。しかしジャングルの奥地にあるため、医薬品の補給は途絶えがちでした」。

玉音放送：

「非常の措置をもつて時局を收拾せんと欲し、ここに忠良なるなんじ臣民に告ぐ。朕は帝国政府をして米英支蘇四国に対し、その共同宣言を受諾する旨通告せしめたり」。

『チョウ・ムンサンの遺書』のナレーション：

「8月15日、戦争は終わりました。ジャカルタでは、玉音放送を聞いたのは一部の日本軍将校だけで、一般市民は終戦の事実さえ知らされていませんでした」。

『第18田無住宅の夏』のナレーション：

「東京の西の郊外、田無、そのほぼ中央に110棟の木造住宅が立ち並んでいる。東京都東京都営第18田無住宅。この夏、私たちは住宅の中で何人か

の元日本兵たちに会った。韓国人、台湾人で、戦犯の罪に問われ、昭和30年頃まで巣鴨刑務所にいた元日本兵たちである」。

「彼らは日本の敗戦とともに戦勝国の裁判にかけられ、戦犯として現地で処刑されたり、15年、20年という重い刑を言い渡された。中には本人が見つからないために、身代わりで刑を受けた人もあるという」。

『第18田無住宅の夏』 池上本門寺松栄院住職：

「この遺骨はチョウ・ムンサンさんね」。

『第18田無住宅の夏』 のナレーション：

「チョウ・ムンサンは昭和22年2月25日、シンガポールのチャンギで処刑された。26歳の若さだった。死の直前までつづっていた遺書に、『たとえ靈魂でもこの世のいずこかに漂いたい。それができなければ、誰かの思い出の中にでも残りたい』と書いている」。

『チョウ・ムンサンの遺書』 のナレーション：

「連合国は日本軍の戦争犯罪を追及する裁判を公開で始めたのです。それは戦争を計画指導したA級戦犯とは別に、捕虜虐待や一般人の虐殺などの罪を問うBC級戦犯裁判でした。連合国は上告なしの一審即決のスピード裁判で、5,700人に有罪判決を言い渡しました」。

「有罪となった5,700人のうち、984人が死刑の判決を受けました。チャンギ刑務所北側に設けられた絞首台で、戦犯は次々と処刑されていったのです」。

「戦犯の中に148人の朝鮮人がいました。そのうち23人が死刑。罪名は捕虜の虐待でした。処刑された1人、チョウ・ムンサン、日本名、平原守^{もり}矩^{つね}。彼は戦争中、タイとビルマを結ぶ泰緬鉄道の建設のために置かれた捕虜収容所の監視員をしていました」。

「裁判で捕虜虐待の罪に問われたチョウ・ムンサンは、1947年2月25日、雨の降る中、絞首刑に処せられました。26歳でした」。

チョウ・ムンサンの遺書朗読：

『『ガチャン』とともに開けるであろう^{かつぜん}豁然としたものを信じて私は行くのです。あの世ではまさか朝鮮人とか、日本人とかいう区別はないでしょうね。日本人も朝鮮人もないものだ。皆東洋人じゃないか。いや西洋人だって同じだ。監房の中から、残る人たちの蛍の光が聞こえてくる。九時の号鐘、のびやかにゆったりと鐘が鳴る。来た。いよいよらしい。これでこの記を閉ず。この世よ幸あれ」。

『チョウ・ムンサンの遺書』 のナレーション：

「李鶴来さん、68歳。死刑判決を受けたあと、懲役20年に減刑されました。李さんは、韓国・朝鮮人元戦犯たちの補償を日本政府に求め続けてきました」。

「李さんが勤務していたのは、タイ側の地点から155キロのところにあった《ヒントク》の捕虜収容所でした。李さんは、自分が捕虜虐待の容疑で戦犯に問われることになった収容所の跡を探そうとしました。李さんら6人の朝鮮人軍属が、その監視をしていました。ジャングルの中には、半世紀前の枕木が朽ち果てて残っていました」。

「李さんの収容所での仕事は、工事を進めている鉄道隊に、連合軍捕虜を労働力として供給することでした。捕虜たちの間では、重労働と栄養失調で倒れる者が続出していました。当時17歳だった李さんは、命令に忠実でした。このことが戦犯裁判で死刑の判決を受ける理由となったのです」。

『チョウ・ムンサンの遺書』 のナレーション：

「しかし、イギリスやオランダは、日本の植民地支配そのものを問題にすることはありませんでした。両国の当局者たちが裁判開始の前から、朝

鮮人は日本人として裁くとあらかじめ取り決めていたのです」。

『父を捜して～日系オランダ人の終わらない戦争』より

「太平洋戦争中、植民地インドネシアで日本軍と戦ったオランダ。戦後、インドネシアから多くの日系オランダ人が引き揚げてきました。インドネシアに駐留した日本軍兵士や軍属と、蘭印系の女性との間に生まれた子どもたちです」。

「父親が日本人だとわかったことで、家族が引き裂かれ、苦境に立たされた女性がいます。日系オランダ人、ナニー・ゲレッセンです。ナニーの母親ヨハンナは、太平洋戦争中、日本軍の抑留所で働いていました。そこで警察官の日本人男性と出会い、ナニーと弟、2人の子どもを産んでいました。ナニーは母親から、終戦後結婚したアルベルトが父親だと教えられてきました」。

ナニー『誰かに別室に連れていかれた記憶があります。目を覚ましたとき、私の上に乗っていたのは継父だったのです。病院へ連れていかれ、妊娠を告げられました』。

「繰り返された性的虐待。ナニーは15歳のとき妊娠しました」。

「ナニーとアルベルトとの間に生まれた子ども、マリアン・ウィルヘルム」。

マリアン『私は理解することができませんでした。受け入れまいと遮断しました。…私は近親相かんによって生まれた子です。母と継父の子ですから。…彼の行為をかばうつもりは一切ありません。ただ原因があるはずです』。

「インドネシアで生まれ育ったアルベルトは、太平洋戦争中オランダ軍の兵士でした。日本軍の捕虜となり、泰緬鉄道の建設現場に送られていたというのです。歩兵兵長だったアルベルト。27歳のとき、ジャワ島に侵攻した日本軍との戦闘に参

加。捕らえられ、収容所へ入れられました。そして1年後、タイへ送られていました」。

「アルベルトが送られた先は、タイとビルマを結ぶ泰緬鉄道の建設現場。とりわけその過酷さで知られる《ヒントク》という地点でした。《ヒントク》では巨大な岩を捕虜が手作業で切り崩しました。インパール作戦に物資を送るため、日本軍は工事を急がせます。重労働に加え、雨期のジャングルでマラリアやコレラがまん延し、死者が相次ぎました」。

「父アルベルトは、なぜナニーら日本人の子に虐待を加えたのか。今年実施された調査によれば、日系オランダ人の4割を超える人びとが、継父による身体的、精神的苦痛を受けていたことが明らかになりました」。

「こうした暴力の連鎖が続いていることに、戦後目を向けられることはほとんどありませんでした」。

桜井：このように見ていくと、《ヒントク》という収容所が運命的な場所であったことがわかります。この地名は、アーカイブの中でつながっていたのです。もしかすると、元BC級戦犯のイ・ハンネ（李鶴来）さんと、ナニーの継父アルベルト（仮名）は、《ヒントク》収容所で会っていたかもしれせん。

オランダ系の入植者が日本によって「被害者」に転落し、のちに日系オランダ人に対して残酷な「加害者」になった。そして、日本の植民地支配を受けた「被害者」である朝鮮人が、日本軍の命令で、あるいは日本軍の力を背景に、インドネシア系オランダ人に過酷な労働を強いる「加害者」となっていた。しかし、日本の敗戦で状況が一転し、オランダと日本、二つの植民地国家のはざまに落ちて、「被害者」になった。これは「被害」と「加害」の非情な連鎖といえます。時を隔てて、最も弱いところに暴力が出現する。日系オランダ

人のナニーという女性の身の上で起こったことが、まさにそれです。

東京裁判では、天皇の戦争責任が不問にされ、それと同時に日本の植民地支配もほとんど問われることがありませんでした。その陰で、個人が背負うことになった過酷な運命は忘れ去られていったのです。

戦後、個人が背負ったものとは何でしょうか。

イ・ハンネさんが巣鴨刑務所から出るときに受け取った引き揚げ証明書の日付は、1956年10月6日です。これは、10年遅れの戦後を第18田無住宅で始めた人たちのそれと完全に一致します。イ・ハンネさんたちは援護法（戦傷病者戦没者遺族等援護法）の対象から外され、祖国からは「対日協力者」というレッテルを貼られ、しかも、その祖国自体も南北に分断され、どこにも行き場がなくなりました。

北朝鮮の開城^{ケソン}出身のチョウ・ムンサン^{ムンサン}の遺骨もまだ故郷に帰っていません。日本はサンフランシスコ条約で国際社会に復帰しましたが、その陰で、さまざまな個人の問題をあいまいにしました。日本政府はアメリカの力を背景に、アジア諸国の独裁政権と取引を行い、戦後処理をうやむやにしてきました。1965年の日韓基本条約は、その最も典型的な例だと言えます。

日本ではアジア太平洋地域における過去の罪過について、いまだに清算が終わらないどころか、かえってその歴史を修正し、否定する傾向が強くなっています。それでも、過去の清算を求める近隣の国々とその国民から受ける批判に責任を感じる日本人はいるのですが、それを「反日」、「自虐的」と批判する勢力が少なからずいるのも現実です。

第2次大戦後の世界秩序は、植民地支配の根源的な矛盾をいまだ克服できていない。植民地主義の根深さをあらためて考えさせられます。このことはこれからも大きな問題として残されていると

思います。

例えば1991年に南アフリカで開かれたダーバン会議。ここでも奴隷制とか奴隷取引、植民地支配が組上に載りました。カリブ諸国などからは、かつての宗主国に対して、植民地支配の責任を問い、それへの謝罪と補償が求められましたが、いまだに解決の糸口は見えていません。

こういうことを言うと、必ず「植民地支配をしたのは日本だけではない」と、自らの責任を相対化しようとする声が返ってきます。

ですから、今日見ていただいたように、被害者が加害者になり、加害者が被害者になっていくという「暴力の連鎖」が今も続いているのです。個人から国家の責任を追及していく視点を忘れてはならないと思います。

これら二つの番組を通してみえてきたのは、BC級戦犯になったイ・ハンネさんの運命と、日系人との間に生まれた少女ナニーさんの身の上で起こったことが、日本軍の無謀な泰緬鉄道の建設現場《ヒントク》でつながっていたという歴史の皮肉です。しかし、私たちはそこに止まるのではなく、さらに歴史をさかのぼり、この悲劇をもたらした植民地主義の罪過をどこまでも追及していかなければならないと思います。

その場合、戦場で戦争犯罪に手を染めた元日本兵の証言が大きな意味をもってきます。例えば、元「従軍慰安婦」の女性たちが、日本国家を相手に補償の訴えを起しましたが、日本政府は韓国政府との間で「完全かつ最終的に解決済み」と答えるのみです。しかし、加害兵士などの証言があれば、慰安所をつくらせた日本国家と、そこで働かされた被害女性たちとをつなぐこととなります。被害者と命令者（国家）、それから実行者が横一線に結びつけば、責任のありかがはっきりしてきます。

最初に見ていただいた『戦犯たちの告白～撫順・太原戦犯管理所1062人の手記～』には、中国

に行って自らの加害の責任を謝罪したけれどもなかなか赦されない、そういう厳しい映像がありました。この放送は、昭和が終わった1989年のものですが、ここに登場した元兵士の証言は、ETV2001『戦争をどう裁くか(2) ～問われる戦時性暴力～』にも出てくるはずでしたが、それを、政治的な圧力を過剰に付度したNHKがカットしてしまいました。NHKはジャーナリズムとして非常に恥ずかしい番組を出してしまった。それから長い時間がたっています。

戦争に関わる番組のほとんどが、戦争は大変だったと訴える被害者の証言を紹介しています。加害の歴史を放送しようとする、ただちにNHKの周りに抗議の街宣車が来たりします。しかし、そういうことにいちいち怯えていたら番組はつくれません。そのためにも、私たちは「戦争責任」について考えることを決してやめないことが大切だと思います。